Smile Man　Box

笑う男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓｍｉｌｅ　Ｍａｎ　Ｂｏｘ

【Ｎコード】
Ｎ１２０９Ｙ

【作者名】
笑う男

【あらすじ】
ここは笑う男の妄想が大量に詰め込まれたパンドラの箱……
という事はないのでご安心を。
また作者の病気が発生して申し訳ない；

真剣でボクを愛してね！（前書き）

彼女の名は、ミハイル・ユークハルト。ドイツ軍所属の１７歳の女の子だ。
彼女は拳銃の扱いに長けている。故に軍やそれに敵対する組織から両手拳銃（ツヴァイ・ハンダー）と畏怖されることもある。
そんな彼女に、昔からの親しい上司兼父親代わりの人物から新しい任務が届けられた。
日本の神奈川県川神市の学園に入学し、その学園の様子を報告してくれと。

彼女は頭を抱えた。

マジこい！　の二次創作です。オリヒロ×大和……、だと思ったら大間違いですよ諸君。
生暖かい目で見守りながら待っていてください。

真剣でボクを愛してね！

第一任務　頼み
２００９年　２月３日
中東　某国　戦闘地域

「隊長、マルギッテ隊からの報告。目標を排除、残りは其方に任せると」
「了解ってマルギッテ隊長に伝えといて」

それは何処かの戦場。砂と石で作られた建造物の残骸に開けられ銃痕や大穴から、激しい戦闘が繰り広げられていたのが分かる。
一つの建物に、十数名ほどの男女がいた。その内の１名は縄で縛られている。
縛られていない側にいる一人の少女が縛られている男の方に向いた。振り向き様になびくオレンジ色のロングヘアーは、一般の男性が見れば目を釘付けにしてしまうほどに美しかった。

「君達のリーダーは『猟犬』にやられたよ、ボク的にはとっとと投降してくれる方がありがたいんだけど」

透き通るようなその声には、縛られている男を圧倒するような雰囲気が含まれていた。しかし、男はそれに従わなかった。

「誰が貴様らに下るか！！　我等の神聖なる大作戦を、破滅に追いやりおって！！」

憎々しげにオレンジ髪の少女を見上げながら男がそう叫んだ。
その返答に少女は呆れたように首を振り、懐から一丁の銃を取り出

した。

ピエトロ・ベレッタM93R

それを先ほど叫んだ男に向けた。

「これは頼みじゃなくて警告。とっとと負けを認めてボク達に投降しろ」

男は少女の瞳を見てしまった。それは全く無機質なもので、男は機械にでも睨まれているのかと思った。それでも男は気丈にも叫んだ。

「ふざけるな！　投降するくらいなら死ぬ方がマシだ！！」

そう叫んだ瞬間、男の頭は真っ赤に弾けた。

「敵組織の全滅を確認。任務完了、これよりマルギッテ隊に合流するよ」

「「「「了解」」」」

彼女達は狩猟部隊。フランク・フリードリヒ中将を司令とする特殊部隊だ。

その名の由来は一度獲らえた獲物を死ぬまで喰らいつき、その喉下を掻っ切る猟犬にも似たていることからそう名づけられた。

ミハイル・Y（ユークハルト）・フリードリヒもその隊の中でも隊長クラスの人間だった。

彼女達は、骸と残骸を残し、戦場を去っていった。

数日後　ドイツ　リューベック

先日の殲滅戦から数日、ボクは義理の父であるフランク・フリードリヒに呼ばれていた。
なんでも緊急の用事があるらしい。
義父様には一生返せない程の恩をある。無下にするつもりなど全く無かった。
ボクは義父様の執務室のドアをノックした。

「入ってくれ」
「失礼します。フランク中将」
「今はプライベートの方で構わんよ」
「それで、何の用ですか？　義父様」
「ああ、実はな……」

その用事の内容を聞いた僕は、思わず心の中で頭を抱えてしまった。

卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍
卍卍卍卍卍卍卍卍

３月２０日
日本　神奈川県　川神市

「ふぅ……」

川神市のマンションの一室、荷物を整理し終えたミハイルは手の甲で額の汗を拭った。
これから一年間お世話になる部屋だ。あまり雑にも出来ない。
テーブルに置いてあったデジタル時計には１８：３３と表示されておりそろそろ夕飯の時間だとミハイルは感じた。
ただ、荷物整理した後のためか自炊がとてもめんどくさく感じた。
そこでミハイルはたまにはと思い、何処かのコンビニに赴くことに

した。
日本に持ってきた自分の愛車であるＺ？ｎｄａｐｐ　ＫＳ７５０に跨りコンビニを探そうと思ったが、昔に同僚に聞いた日本の丼物という物に興味を持ったミハイルは進路変更、梅屋へと向っていった。

「いらっしゃいませ、お一人様でしょうか？」

ウエイトレスに一人だと伝え、ボクは案内された席に座った。
スタミナ丼と味噌汁・漬物のセットを頼んだ後、ボクは先日の事を思い出していた。
……いくらなんでも、親バカ過ぎです、義父様。

卍卍

「実はな、お前にクリスよりも先に日本に向って欲しいのだ」
「は？」

ボクは思わず耳を疑った。
クリスよりも先に日本に向えと？

「義父様、何故ボクが先に日本に向わなければいけないのですか？」
「これからお前達が入る川神学園について、偵察をして欲しいのだよ」
「アホですか！？」
「何故だ！？　娘を心配してこれから過ごす学園を調べる必要があるだろうが！！」
「いくらなんでも過保護過ぎです！！　と言うか娘という点ならボクも同じですよ！！」
「お前はマルギッテと共に狩猟部隊で隊長の一人にまでなっている

じゃないか。そこらの人間とは比べ物にならない位に強い。だから、お前に頼んだ」

「いくらなんでもないと思います！！」

ボクはそう言って頭を抱えて俯いた。本当にこの義理の父は過保護だ。余りにもクリスに対して過保護すぎる。確かにこれから行く川神学園に不安が無いと言えば嘘になると思うが、だからといって特殊部隊の隊長を偵察に行かせるとはどういう了見か。

「非常にすまないと思っている。しかし、やはり不安になってしまうのだ。実戦経験があるお前なら大丈夫だと思うが、クリスはまだそういう経験が無いからな……」

「……」

確かに、クリスは技術面では高いがボクから見れば実戦を知らない女の子だ。

不安になるのは当然だが、だからと言って義理ではあるが同じ娘を先に送り出すのは間違っている気がする。

でもまあ、やっぱりクリスが心配なのは本当だし……しょうがない。

「今に始まったことでもないですし、仕方ありませんね。分かりました。その任務、受けますよ」

「おお！　受けてくれるか」

「言っておきますけど確かに私もクリスを心配してますが義父様ほどではないですからね」

ボクはそう言って部屋を出て行くことにした。これからバイクの輸送の手続きやら銃火器関係の手続きやらがあるからね。

卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍

卍卍卍卍卍卍卍

「……様、お客様？」

「え？　あ、すいません。ちょっと考え事をしてました」

どうやら数日前の事を思い出すことに集中しすぎていたらしい。
注文した物を持って来ていたのに、何の反応も無いから不審に思ってしまったのだろう。

「ご注文のスタミナ丼と味噌汁と漬物でございます。ごゆっくりどうぞ」

トレイから料理を下ろしたウエイトレスは一度礼をした後、別の所に向かっていった。
彼女も仕事をしている人間だ。仕事中に一人の人間に構っている暇は無いのだろう。
とまあ、ボクはすぐさまウエイトレスのことを忘れ、目の前の丼に目を落とした。
特製ダレのかかった赤茶に輝くその豚肉からは、何とも言えないイイ匂いが漂ってくる。
早速ボクは割り箸を割り、丼の中からご飯と豚肉をすくって口に運んだ。

「♪」

おいしい。
甘辛い特製ダレと豚肉とご飯がほど良く絡み合ってどんどん箸が進む。
食べている途中、ふとその白い物体が目に入った。生卵だ。
そういえば同僚はこんなことも言っていたっけ。溶いた卵をその丼

に流し込んで食べるとまた違うと。
それを思い出したボクは卵を溶いて残り半分になった丼に流し込み、すぐさまかき込んだ。
これがまたおいしい。
もう何もいえない。実家で食べる料理もおいしいのだが、これはこれで捨てがたい味だった。
今度からもここは贔屓にしよう。
味噌汁と漬物を食べ終わった頃には、ボクは心の中でそう誓った。

「６８０円になります」

会計を済ませてこれから家に帰ろうかなと駐車場にむかっていた時、ズボンのポケットの中に違和感を感じた。いざポケットの中を探ってみると、違和感の正体が分かった。
携帯が無い。
さっきの店に置いてきたか、何処かに落としたかのどっちかだろう。
アレには大切な物をストラップとしてつけている。無くしたくはなかった。
ボクは来た道を戻ることにした。

ある程度歩いていると、二人の男性が何かを手にして放しているのが伺える。
一人は筋骨隆々の青年と、もう一人は細くひ弱な印象を感じる少年だ。
来た道の先に立っているのから、二人に近づくことになるのだが、ひ弱な少年が持っている物に目が行った。私の携帯を持っていたからだ。
探し物を持っているのだ。私は二人に話しかける事にした。

「あの、その携帯ボクのなんですけど」

話し合っていた二人にボクは話しかけた。出来るだけフレンドリーを心がけて。

「お、すげー美人！！」

「こらガクト、いきなりナンパ仕掛けないでよ！」

ボクが入ってきたことで、筋肉さん（仮）とひ弱君（仮）がちょっと揉めていたけど、筋肉さんは直ぐにこっちの方に向いて、

「お嬢さん、一緒にお茶でも」

直ぐにナンパの体制に入った。

「だから止めてって言ってるでしょ。すいません、友達がこんなんで」

「気にしませんよ。それで、その携帯……」

「あ、そうでしたね。一応、確認出来る物って付けていますか？」

ひ弱君は一旦携帯を後ろのほうに回した。まあ、間違ってないね。だって所有者偽って悪用されたら堪ったもんじゃないし。

「えっと、ちょっと煤けたメダルがストラップとして付いているんですけど」

「えぇっと、煤けたメダル……。うん、合ってる。あなたのでしたね」

「ありがとうございます」

本当に良かった。唯一の、ボクのお父さんの形見。子供の頃にお父

さんからプレゼントされたメダルだ。

「大切な物なんですね」
「はい、父からの贈り物で」
「良かったですね」

そう言ってひ弱君は笑顔こっちに向いたけど、照れたのかどうか分からないけどすぐに俯いた。
どういう事なの？

「ああ、コイツ仲間内の女子以外と目を合わせられないですよ」
「あ、ガクトそれ言わないでよ！！」

恥ずかしがり屋なのかな？　目を合わせられるようになれば女の子の一人ぐらいは捕まりそうだけど、まあそんな事はどうでもいっか。

「改めて、御礼を。ありがとうございました」
「い、いえ、どういたしまして」

そう言って今度こそボクは帰路に向った。

卍卍

４月２４日

寝坊したぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！
余りにも平和を満喫しすぎたぁぁぁぁぁぁ！！
今日クリスと義父様が来るというのにぃぃぃぃ！！
急いで身支度を済ませたボクは、鞄に買っておいたカロリーメイト

を入れて駐車場までダッシュする。
エレベーターを待っている暇なんて無いから、階段を一気に何段も飛ばして駆け下りた。
駐車場に着いた僕はＺ？ｎｄａｐｐに飛び乗ってスロットル全開にして走り出す。
スピードが出ていた為か、道路に出るときに数秒浮いたけど気にする暇は無い！　この国の法廷速度を三割ぐらい超えたスピードで川神学園に向っていった。

卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍

「グーテン・モルゲン」

なん……だと……？
心の中、僕は入ってきた転入生なのか何なのか分からない朝に見かけた人に驚いた。
皆が戸惑っている中、大和が思い出したかのように声を上げた。

「ああ！？　あの時の――」
「おお、君か。また会ったね」
「本当に転入してきちゃったよ……」

僕は思わずそう呟いた。

「こんなオッサン補強してどーすんだ」
「皆勘違いしないよう。この方は転入生の保護者だ」
「あ、そーなんだ、びっくりしたなぁ。もぐもぐ」
「こら熊飼！　ＨＲ中なんだぞ！　ピザを食うな！」

転入生の親御さんだと分かって安堵したクマちゃんがピザを食べようとしたが、それを小島先生に鞭で叩かれた。

「あ、ごめんなさい！　驚いてお腹がすいちゃって」

「罰は百叩き。これも日本の伝統ですな」

いや、全然違います。ここじゃなかったら教育委員会どころじゃないレベルのことです。というか江戸時代ですそれ。

「――あの、ご息女は？」

保護者の人しか入ってこなかった事を不振に感じた小島先生は、保護者の人に転入生は何処と聞いた。

「ご安心を、時間には正確な娘達です。まもなく駆けて参りましょう」

小島先生の気持ちを汲み取ったのか、オジサンは安心させるようにそう言うと窓を指した。

皆もそれに合わせて窓の方に向く。

「グラウンドを見てみるがいい」

「……？　げっ！？」

最初に気づいた大和は、声を上げた。

「どうした大和、何が見えるんだ？」

「女の子が学校に乗り込んできた」

「何だそりゃ！！」

大和の発言に不審がるガクト。

「何かあるらしいな。よし見たいものは見てよし」

小島先生の許可が下り、皆がざわざわと窓に群がった。
僕もそれに合わせて窓に近づく。
僕は、皆が窓から見た光景の感想を代弁するかのように呟いた。

「確かに、乗り込んできたね」

それは余りにも驚く光景だった。

「馬で」

それで学校に乗り込んだらダメでしょ、色々と……。
そんな僕の気持ちを知ってか知らずか、彼女はここまで聞こえるように高らかに宣言した。

「クリスティアー・フリードリヒ！！　ドイツ・リューベックより推参！！　この寺子屋で世話になる」

馬に乗り、風にたなびく金髪が美しい。

「おおお！　可愛くね、マジ可愛くね！？」
「超・当たりなんですけどぉぉぉぉぉ！！！！！」

乗り込んできた美少女を目にし男子達が咆哮する。

「だっはっはっはっ馬かよ！　面白ぇあいつ面白ぇ！」

それを見たキャップは大笑いしていた。

「ぐっ、女かよ、まずった！　賭けに負けた」

「あっ、俺もボロ負けだ！！　でもそんなの帳消しになるくらいレベル高ぇよ！」

「うわ……これはもう完全に負けたわ……でも馬って……？　ねえ皆！　何かまだ来るわよ！！」

小笠原さんが何かを見つけて、指す方向に皆の視線が向かった。聞こえてくるのは、聞いた事もないバイクのエキゾースト音。しかもそれはだんだん近づいてくる。

「まさか、このエキゾースト音は……！？」

「知ってるの？　スグル？」

音を聞いて驚いているスグルに、この音の正体を聞いた。

「ああ、本当だったら博物館に展示されているような代物だ」

「博物館？」

だんだんと見えてきた。抹茶色の塗装が施された、現代に蘇ったそれが。

「第二次世界大戦時に、ドイツ軍で使われていた軍用バイク……」

グラウンドに入ってきたそれは、砂埃を巻き上げながら横滑りで停車した。

「Ｚ？ｎｄａｐｐ　ＫＳ７５０だ」

砂埃が収まったそこには、オレンジ色の髪をたなびかせた美少女がバイクに乗っていた。
着けていたゴーグルを首にかけた美少女は、先ほどの少女と同じように宣言した。
でも、僕はバイクに乗り込んできた以外に、驚いていることがある。
それはガクトも同じだ。だって……

「遅れてすいません！！　ミハイル・Y（ユークハルト）・フリードリヒ！！　クリスティアーネと同じくドイツ・リューベックから来ました！！　分からないことだらけかもしれませんが、よろしくお願いします！！」

先日に出会った少女だったからだ。

真剣でボクを愛してね！（後書き）

ミハイル・ユークハルト・フリードリヒ
１７歳
女性
１５６ｃｍ
所属ドイツ軍狩猟部隊→川上学園２－Ｆ
髪オレンジ色のロング
瞳　緑
一人称　ボク
使用武器
ピエトロ・ベレッタＭ９３Ｒ　二丁
ＩＭＩ　ウージー　二丁
―Ｈ＆ａｍｐ；Ｋ《ヘッケラー＆ａｍｐ；コッホ》　ＳＬ－９ＳＤ
その他手榴弾やナイフなど。
趣味　バイクに乗ったり集めること。愛車は１５歳の誕生日に貰ったＺ？ｎｄａｐｐＫＳ７５０である。

ドイツ軍狩猟部隊所属している女の子。幼い頃に父も母もテロに遭って亡くなるが、そこを両親の知り合いであったフランク・フリードリヒ中将に養子にしてもらった。その時からフランクの娘であるクリスティアーネ・フリードリヒと姉妹にも似た関係になっている。お互いに得意武器での模擬戦等もやることがある。
趣味はバイクに乗ったり集めたりすることで、暇な日には愛車であるＺ？ｎｄａｐｐ　ＫＳ７５０に乗って何処かに出かけたりする。
たまにクリスを載せていくこともある。
最近、義理の父のフランクの親バカっぷりとその父に対するクリスの盲信にも等しい尊敬っぷりに頭を抱えているとか。
バイク以外に、最近では甘いスナック菓子を食べる事が好きになっ

たが、浴場で悲鳴が度々聞こえているのはフリードリヒ家のお約束にすらなっているらしい。
二丁拳銃と蹴り技をよく使う。

ピエトロ・ベレッタM９３R
イタリアの老舗銃器メーカー、ピエトロ・ベレッタ社で製造されているハンドガンである。
９ｍｍ×１９の弾丸が発射可能であり、銃自体の小ささから接近戦に向いている。
最大の特徴は引き金の前に取り付けられたグリップと、３点バースト機能である。
対テロ部隊用や公的機関に主に支給される。
なお、ミハイルは３点バーストをフルオート連射機能に改造して使っている。

ＩＭＩ　ウージー
イスラエル・ミリタリー・インダストリー社で製造されているサブマシンガンである。
Ｍ９３Ｒと同じく９ｍｍ×１９の弾丸が発射であり、中～近距離戦に向いている。
ドイツで製造されたサブマシンガン、ＭＰ５よりも銃としての性能は劣るものの、構造がシンプルで整備がしやすく、高い信頼性を得ているため、兵器としての性能はもしかしたらこちらの方が上かもしれない。
因みに、ミハイルは４０発の弾丸を装填可能なマガジンを好んで使用している。

Ｈ＆ａｍｐ；Ｋ　ＳＬ－９ＳＤ

ヘッケラー＆amp;コッホ社で製造されているスナイパーライフルである。
７．６２ｍｍ×３７サブソニック弾丸が発射可能であり、遠距離戦に向いている。
同社のＧ３６アサルトライフルのバリエーションであるＳＬ－８スナイパーライフルを特殊部隊仕様に改良したのがこのＳＬ－９ＳＤである。
セミオートマチックの為、技量があれば目標に直ぐ次弾を叩き込むことが可能である。

Ｚ?ndapp　ＫＳ７５０
ミハイルが誕生日の時にフランクからプレゼントとして送られた旧ドイツ帝国陸軍軍用バイクである。
第二次世界大戦時に使用されたもので、その本来の使用用途は斥候、諜報、電撃戦。決してツーリングなどで使用する代物ではない。
サイドカーを装着することも可能で、ミハイルはたまにクリスを乗せて何処かに出かけることもあった。
ミハイルはこれを何処で手に入れたのかとフランクに聞いたものの、フランクは曖昧に答えるだけで最後まで教えてもらえなかった。

友人からまじこいを勧められてやってみたらハマってしまって病気発生。
復帰も兼ねてこれを投稿してみました。
武器の解釈に関しては、作者独自のものです。
若干の参考はありますが；

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1209y/

Smile Man　Box

2011年11月1日13時21分発行